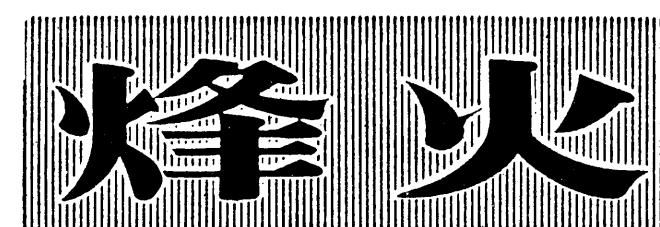


☆帝国主義の侵略反革命、社会帝国主義の武装反革命を粉碎し、世界革命戦争一世界プロ独を組織する世界単一党を国際階級闘争の最前線に組織せよ！

1982年  
5月10日  
第343号  
編集発行人 高木一夫  
一部 200円



## 共産主義者同盟（全国委員会）

- 大阪戦旗社 大阪市大淀区本庄東2丁目2の31  
とみやビル15号 Tel(06)371-3706
- 郵便振替 大阪3-63333 高木一夫
- 銀行口座 第一勧銀 515-1058150 高木一夫
- 東京戦旗社 東京中央郵便局 私書箱1114号

# 5月反核東京行動から6月安保闘争へ

5・23 5・15 5・14

## 反戦反核東京集会

天皇参加の沖縄「復帰」十周年記念式典粉碎！  
三里塚空港粉碎！安保・改憲・日韓闘争勝利！  
全国総決起集会（午後六時半・清水谷公園）

**反戦反核運動のうねりの中  
に。プロレタリアートの  
革命的政治を組織せよ！**

全國のたたかう労働者人民諸君、全世界で反戦反核のうねりが起こっている。このうねりのただ中に、プロレタリアートの革命的政治を組織すべく、五・二三反核東京行動から六月安保闘争へ全力で決起しようではないか。

昨年来、反戦反核のうねりが欧州全土をおおいつくしている。昨八一年十月十日の西ドイツ・ボン集会（参加者三〇万人）から約三ヶ月間に、ロンドン（二五万人）、ブリュッセル（二〇万人）、ローマ（五〇万人）、アムステルダム（四〇万人）という空前の昂揚をしめし、さらに持続している。この動きはさらに米本土にも波及し、日本では三月二一日広島一九万人集会から五月二三日反核東京大集会が、三〇万人規模で予定されている。これに対して、プロレタリアートのとるべき革命的、実践的態度とはなにか。これが明らかにされなければならない。

広島、長崎に原爆が投下されてから三七年近くをへた八〇年代のこんにち、第二次帝国主義戦争後における最大の世界的危機の激化、世界戦争―核戦争の脅威が増大している。その最大の震源地は米帝である。レーガン政権は一連の対ソ強硬政策と、中性子爆弾の製造再開、核戦略軍備増強総合計画、化学兵器生産再開決定や、今後の五ヶ年で一兆六〇〇億ドルの軍事予算計上にみられる大軍拡路線を開拓している。

レーガン政権は戦略核戦力を増強すると同時に、この米ソ均衡のもとでの東北アジアや中東、ヨーロッパなど任意の特定地域での戦術核兵器の限定的使用といういわゆる「限定核戦争構想」をうちだした。まさに核戦争の脅威が具体的、現実的に全世界の労働者人民の頭上をおおつているのだ。

一連のヨーロッパにおける反戦反核のうねりは、米ソの核軍拡のもとでの核配備―核のハリネズミと化しているヨーロッパの現状と核戦争の現実的脅威に対する強い危機感を母胎に、帝国主義諸国全体をつらぬく経済危機―現実生活への広範な危機感を背景としている。いまや広範な人民が、このような回路を通して大規模に政治に引き入れられはじめている。日本における広島集会から東京集会への流れのなかで、われわれが直視しなければならないのもこの事実である。

広島集会から五月東京集会へとむかう日本の反戦反核運動は、総評を中心と共に、ヘゲモニーとした、プチブル平和主義を最大の存立基盤としている。それは六〇年代後半におけるわが国の国際反戦闘争が、革命的左翼によって独自に準備され、その運動の内部に、自国帝国主義の侵略反革命との闘争、民族解放―社会主義勢力との連帯、新たなインターナショナルの建設という問題を内包したこととは質的に異なる。『極東有事研究』に示される「朝鮮有事」を想定した日帝の海外派兵―直接的な侵略反革命戦争準備、これと連動したブルジョワジーによる「日本を守る国民会議」「安保改定百人委」や、労働貴族どもが帝國主義的労戦統一など攻勢的な政治再編が展開されている。プロレタリアートの革命的部分は立ち遅れている。プチブル平和主義の幻想と峻別したたかうプロレタリアートの強固な隊列をこの流動のただなかに登場せしめようではないか。

英・アルゼンチン戦争に示されるように米帝をヘゲモニーとした「西側」の均衡が破れ、資源と領土をめぐつた帝國主義的争奪戦が戦争形態をもつて現実化した。朝鮮、イラン、エルサルバドル、そしてボーランドで新しい階級闘争の波が持続している。

労働運動の産業報国会化―自國帝国主義の戦争準備と正面からたたかいぬくプロレタリアートの真紅の隊列を五一六月政治過程のなかにあらあらしく登場せしめよ！

# 沖縄を戦場の島と化す五・一五 攻撃と対決し現地闘争に起て

沖縄は七二年五・一五「返還」から十年目を迎えるとしている。「復帰」十年は、ブルジョアジーの「平和で豊かな沖縄」の空約束とは裏腹に、沖縄基地強化、沖縄人民の生活破壊、沖縄への差別抑圧支配のいっそうの強化へと帰結した。なぜか。それはそもそも七二年「返還」が、沖縄人民の戦後二七年間にわたる米軍政からの脱却の願いをも逆利用しておこなわれた、日本帝国主義によるアジアへの侵略反革命の全面化のための攻撃であったことに起因している。帝国主義者にとっての「沖縄問題」とは、あくまでも施政権の問題であり、軍事基地の新たな再編強化の問題であり、沖縄人民の全生活はこれに徹底して従属させられるべき問題としてのみ存在したのである。

この「返還」のペテン的反革命的性格は、十年目を節目にますます倍化している。軍用地強奪とCTS（原油備蓄基地）建設、そして「復帰十年記念式典」への天皇列席策動に象徴される日帝の戦争とファシズム準備の死活をかけた攻撃にたいし、反戦反基地闘争の戦闘的伝統を堅持する沖縄労働者人民はいま、日本帝国主義打倒を真正面からかかげる沖縄闘争の道にふみだそうとしている。そしてこれを領導する社共と分歧した新たな指導部を建設するための苦闘の途についた。

「復帰」十年の本年五・一五が日帝国家権力と沖縄労働者人民との、十年間の総決算をかけた激しい階級攻防の幕あけとなるのは必至である。全国のたたかう労働者人民は、沖縄人民とともに五・一五闘争を沖縄闘争の新たな起点とすべく、総力をあげて決起しなければならない。

## 日帝の沖縄支配 強化の野望

八〇年代に入りてはじまつた国際階級闘争の新たなうねりは、国際帝国主義諸列強を足もとから搖がしつつ、帝国主義の死活をかけた侵略反革命戦争へのむきだしの野望を露わにさせた。

米帝＝レーガンは、史上空前の巨額軍事予算を背景に、NATO、日米安保など帝国主義の諸軍事同盟の再編・強化と連動した、国際階級闘争総体の圧殺と鎮静化を自らの使命とした大軍拡路線をつき進んでいる。

わが日本帝国主義も独自の利害にもとづいて、米帝の世界戦略と結合しつつ、侵略反革命戦争とファシズム準備に拍車をかけている。朝鮮階級闘争に対する米帝との共同軍事制圧をもくろむ「極東有事研究」開始をもって、現在の安保再編・軍備増強・憲法改悪の一切が戦争準備の目的のために統合されつつある。またこれと結びつき、政党再編、労働戦線再編、改憲・国防を結集軸とした「国民運動」の組織化という既存社会勢力の再編を当面の焦点とした国内統治形態のファシズムへの転換の準備がおし進められつつある。

かかるなかで、アジアにおける侵略反革命前線基地拠点として、七二年、米帝から日帝へと肩がわりされた沖縄への支配は、いまや「復帰十年」を期して、日帝の総決算ともいすべき段階に突入している。過酷な米軍政支配と「基地＝戦場の島」からの脱却をかけた「平和憲法への復帰」の悲願は、帝国主義の

土足によって無惨にふみにじられた。いま、

沖縄人民には、最も熾烈で先鋭な日米帝の戦争とファシズムへの暴力的動員の攻撃が息もつかさず打ちおろされている。それは次のような姿をとつてたちあらわれている。

第一に、沖縄侵略反革命前線基地の「アジアの要石」から「世界の要石」としての強化がはかられようとしていることである。かつて陸軍を主力としていた在沖米軍は、いまや海兵隊・空軍を主力部隊として再編され、世界のどこへでも展開する緊急展開車(RDF)の拠点基地機能としての純化がはかられている。

第二に、日米共同作戦体制の実質化が、在沖米軍と自衛隊との共同軍事演習を通じて遂行され、まさに有事法体制の先取り的実施が沖縄において恒常化されていることである。

全国の米軍基地の五三ヶ所がこの狭い島にひしめき、射爆演習、上陸訓練が沖縄人民の眼前で強行され、県道が封鎖され、農作業場に銃弾がとびかい、有無をいわせず軍用地のために土地が強奪されている。

第三に、日帝の戦争準備にむけた沖縄の改造と、強掠取・強収奪の進行である。「沖縄振興開発計画」の一環として開始されたCTS建設は、企業CTSの国家借り上げに端的にしめされるように、戦争準備のための石油備蓄という性格をますます鮮明にしている。

また「本土」企業の進出と土地買占めなどのなかで、企業倒産があいつぎ、「本土」の三倍にもぼる高失業率、全国平均比六六%といいう低所得が常態化させられている。

第四に、沖縄の既存政党再編をテコに進行してきた沖縄階級闘争の変質－ファシズムへ

## 沖縄闘争の 全人民的性格

われわれは五・一五攻撃が、日帝の侵略反革命戦争準備の新たな段階を画するものであることを、前章で明らかにした。この攻撃と正面から対決する全人民的政治闘争の大爆発を組織化することが緊要の任務となっている。それは、同時に沖縄、「本土」プロレタリアート人民の革命的団結の形成にむけた飛躍を要請するものにほかならない。

すでに沖縄階級闘争が、日帝の取り引きによって、強権的に日帝の新たな支配のもとに引き入られて十年たつ。にもかかわらず、「日帝足下階級闘争」と総称される新たな広大な戦場において沖縄、「本土」プロレタリアート人民のあいだに深く内包される隔壁は、うち破られずに、帝国主義ブルジョワジーの手によって拡大されてきた。一方で、帝国主義の沖縄人民への抑圧と強制にたいする「本土」労働者人民の屈服が進行し、侵略反革命前線基地との過酷なたたかいを沖縄労働者人民の一身に荷してきたという否定的事態が横行している。他方、沖縄階級闘争内部には高度に発達した帝国主義心臓部という戦場の未経験ゆえに、沖縄階級闘争が経験してきたたかいの歴史と伝統を、日帝足下階級闘争の戦場に解き放ち、自らの解放をかけて参戦しない過渡的弱点が先進的部分にすら残存している。この分断と分散の現実につけこみ、日帝は容赦なく、エセ「沖縄—本土一体化」論、「同胞化」論をもって上から反革命的統合をおし進めている。われわれは何としてもこれをうち破らなければならぬ。

では、日本帝国主義打倒—プロレタリア社会主義革命の勝利にむけて、沖縄、「本土」プロレタリア人民がともに隊伍を形成し、進撃を開始するためには何が問われているのか。われわれは七二年「返還」を通じて日本階級闘争の内部に鮮明に突きだされた「民族的問題」を正面からとらえることを通して、これまでの解答をたたかいとらねばならない。

沖縄階級闘争は、戦後、反米民族運動として発展してきた。それは沖縄のおかれてきた歴史的位置を如実に物語るものである。

沖縄における民族運動の勃興と覚醒は、沖縄を侵略反革命前線基地拠点の要とせんとする過酷な米軍政支配とのたたかいのなかで燃えあがったものである。それは沖縄戦の悲惨な歴史的体験にもとづいた「軍隊は人民を守らない」のスローガンに端的にしめされるよう、帝国主義の侵略反革命戦争の反人民的本質を暴き出し、「反戦平和意識」と称される戦闘性を広範に沖縄人民のなかに培かつてきた伝統をもつものである。

米帝に直接統治を断念せしめたこの戦闘的伝統を崩壊させることができ帝国主義の沖縄支配の要であった。日帝が新たな肩がわりを開始して十年、一方における、沖縄の政治・経済・社会の中央集権国家への暴力的統合と、

「本土」資本の進出、他方における階級分解の激化の過程で、沖縄革新の名で呼ばれてきた諸政党の社会排外主義への統合が進められてきた。日本帝国主義はこれら社会排外主義潮流をしたがえて、戦争とファシズムの道へ再度、沖縄人民を動員せんとする攻撃をつよめている。

いまや沖縄階級闘争は、かかる攻撃に對峙しつつ、これまでの闘争経験からの飛躍の岐路に立たされているのである。すなわち一挙

的に眼前にあらわれた「国際的に結合した資本と国際的な労働運動との対立」をめぐる攻防のなかで、誰とともにどのような敵とたたかい、いかなる権力を樹立するのかという問題が本格的に煮つまりはじめ、反米民族運動の戦闘的旗手から、自國帝国主義打倒をめざす階級闘争への転換点に立っているのである。それは同時に「本土」階級闘争においても、強いられた孤立のなかで培かれてきた沖縄階級闘争の戦闘的伝統を、日本階級闘争総体の勝利を決するものとして自己の内部に獲得し、もって温存する排外主義を一掃し、帝国主義心臓部の革命運動の前進を沖縄人民とともにきりひらきうるか否かの転換点でもある。

沖縄、「本土」間のプロレタリア人民の革命的団結の形成は、相方の飛躍をかけたきわめて重要な課題となっている。日帝の戦争とアシズム準備の跳躍台!五・一五攻撃を前にして、われわれは以下五点の基軸のもとに総力をあげて、これへの実践的解答をたたかいとらなければならない。

## 五・一五闘争の基軸的任務

第一に日米安保体制の戦略拠点である沖縄侵略反革命前線基地強化との直接的たたかいを

侵襲を開始するためには何が問われているのか。

沖縄基地は中東・アジア(朝鮮)にたいする直接出撃拠点であり、日米共同軍事体制の中心的役割りをなう恒常部隊として在沖米軍・自衛隊は存在している。日帝の戦争準備との闘争は、この沖縄軍事基地との闘争を避けはりえない。米軍特措法を使つた軍用地の強奪や、これを突破口とした有事法体制の沖縄への先行的導入を許してはならない。

第二に日帝「本土」の「捨て石」としての沖縄戦をひきつゞ、日帝の安全弁としての沖縄への差別・抑圧にたいするたたかいを組織することである。

こんにち基地機能の再編と「本土」資本の流入のなかで、企業倒産があいつぎ、「本土」の三倍といわれる失業者群が生みだされている。沖縄での低賃金構造は固定化され、沖縄人民の少なからぬ部分は「本土」労働市場への流出を強要されている。さらに追いうつよう、「沖縄輸血経済」論(八一年二月日経新

聞)にしめされる——すなわち「戦中、戦後の苦難の償い」としておこなわれてきた「財政援助は甘えの構造を作り……麻薬になる」とする——差別キャンペーンが開始されている。戦争準備の直接的波頭に沖縄人民を投げ入れるのみならず、あらゆる側面から沖縄人民への抑圧が強化されているのだ。

第三にペテン的「同胞論」、エセ「沖縄—本土」一体化論など敵階級の排外主義宣伝との闘争である。

戦前の皇民化教育がそうであったように、「本土」一体化の幻想をつくりだし、沖縄人民の苦悩を逆手にとつて新たな戦争の道へひきずりこまんとしている。幾度となく天皇沖縄上陸策動を阻止された日帝は、これをしつようにならいつつ、また沖縄人民がその戦闘的伝統をかけて最後まで導入を阻止してきた自衛官募集業務や主任制にたいして、西銘をして「復帰したのに沖縄だけ特別ではまずい」と叫ばせるなど、反革命的「統一と融合」の道を掃き清めてきた。「自立・解放」に託した沖縄人民のこれとのたたかいに連帯し、宣伝を粉碎しつくさねばならない。

第四に階級的労働運動構築のたたかいを内包した沖縄、「本土」をつらぬく全人民的政治闘争を組織しつけることである。

敵階級の沖縄支配強化の柱のひとつは、沖縄階級闘争の牽引者でありつづける沖縄労働運動の解体にある。その攻撃は日本労働運動総体への産業報国会化攻撃の激化とともに、革命的団結と同権の獲得のために、排外主義宣伝を粉砕しつくさねばならない。

第五に社共・社帝潮流と分岐した革労党を冲縄の地に建設することである。

世界的な戦争の危機の時代への突入は、国際的なプロレタリアートの陣営を築きあげることを要請しており、われわれにとって眼前の敵!日本帝国主義を打倒する「单一の中央集権化された戦闘的な組織」を、沖縄、「本土」労働者人民の共通の努力によって建設することが緊要の任務となっている。そうして

日本帝國主義を打倒し、継続する国際的規模での帝・社帝の争闘戦に、沖縄と「本土」のプロレタリアートが单一のプロ独立国家として出撃するか、緊密な同盟をむすんだがいに独立したプロ独立国家として出撃するかは、こんにちの日米帝との死闘のなかでの沖縄と「本土」のプロレタリアート人民の結合が決定するであろう。いま必要なのは、ブルジョ

# 反戦地主先頭に 沖縄 軍用地強奪へ反撃の火の手

## 県収用委の強制収用裁決弾劾!

アジーのあらゆる分断のもちこみを許さず、  
沖縄「本土」プロレタリアートの強力な階級的結束に支えられた、单一の前衛組織を建設するため奮闘することである。この課題に正面から解答することがレーニン主義「プロレタリアートの国際的團結の創造と民族自決権」に関する革命的継承の立場である。

アジーのあらゆる分断のもちこみを許さず、  
沖縄「本土」プロレタリアートの強力な階級的結束に支えられた、单一の前衛組織を建設するため奮闘することである。この課題に正面から解答することがレーニン主義「プロレタリアートの国際的團結の創造と民族自決権」に関する革命的継承の立場である。

命的統合の野望を「左」から尻押ししようとしている。  
彼ら社帝潮流は、社会党の「安保タナ上げ」に象徴されるように、帝国主義の生命線である基地と沖縄支配にはいつさい手をかけず、「特別措置法」「基地整備資金」などの改良のあれこれにたたかいを企むせんとする部分である。「米軍特措法」を適用しての軍用地強奪攻撃にたいして彼らは、「憲法に保障された民主主義を守れ」という主張を対置することによって、沖縄にかけられた敵の先取り攻撃を隠ぺいし、沖縄においては戦後民主主義など存在しなかつたことさえおしかくし、沖縄人民を再度、「平和憲法」の幻想のもとにつなぎとめようとするのである。彼らは日本帝の危機が深まれば深まるほど、「基地との共存」の立場を色濃くし、戦争とファシズムへの合流をつよめていくほかはない。

五・一五攻撃を頂点とした日帝の沖縄をめぐる野望と、これに対決する任務は鮮明となつた。先進的労働者人民は、たたかいを内部から変質させんとする社帝・右翼日和見主義との大胆な分歧をきりひらき、五・一五沖縄闘争の全人民的高揚をたたかいとらねばならない。

七二年「返還」から十年。社会帝国主義潮流のもとに統合された沖縄社会党、社大党、人民党などの諸政党は、こんにち沖縄人民から「保守と革新の区別がつかない」と指弾されるとまで反革命的純化をとげている。社会党は、一時期、飛鳥田によつて提唱された「沖縄特別自治州構想」に典型なように、帝國主義にとっての沖縄の戦略的位置をおおいかくし、日帝支配を前提とした単なる「地方自治」の拡大の要求に人民の注意をそらそうとしている。

同様に日共は、「本土との格差是正」をかかげて日帝に政策改良を要求し、日帝の反革

命的統合の野望を「左」から尻押ししようとしている。  
彼ら社帝潮流は、社会党の「安保タナ上げ」に象徴されるように、帝国主義の生命線である基地と沖縄支配にはいつさい手をかけず、「特別措置法」「基地整備資金」などの改良のあれこれにたたかいを企むせんとする部分である。「米軍特措法」を適用しての軍用地強奪攻撃にたいして彼らは、「憲法に保障された民主主義を守れ」という主張を対置することによって、沖縄にかけられた敵の先取り攻撃を隠ぺいし、沖縄においては戦後民主主義など存在しなかつたことさえおしかくし、沖縄人民を再度、「平和憲法」の幻想のもとにつなぎとめようとするのである。彼らは日本帝の危機が深まれば深まるほど、「基地との共存」の立場を色濃くし、戦争とファシズムへの合流をつよめていくほかはない。

他方、かつて併合粉碎・自決権支持をこそぞつてかかげた右翼日和見主義派は、ことごとく自己の独自の沖縄闘争論を喪失し沈黙している。もとより彼らの併合粉碎論は、復帰運動という形をとらざるをえなかつたとはいえ、そのなかで成熟してきた沖縄階級闘争の地平とはまったく無縁のものである。それが客観的に果たした役割は、日帝の沖縄支配との闘争を沖縄人民の肩にのみ負わす犯罪性にとどまらず、過去の沖縄の民族主義政党と同じくしてしまおうとするものにほかならない。こんなにちの彼らの沈黙は、沖縄闘争の発展方向にいっさい責任ある立場をもちえていない

彼ら右や左の自然発生性への拝跪主義者はちは、こんにち沖縄階級闘争がつきあたる壁を、沖縄「本土」プロレタリアートの革命的團結の形成という意識的な闘争によって突破するという方向を、人民の前にさししめすことができないでいる。

すべてのたたかう労働者人民諸君! 社帝潮流の敵対を粉碎し、日帝の戦争とファシズム攻撃に正面対決する沖縄闘争の全人類的高揚をともにつくりだそう。沖縄「本土」をつらぬくプロレタリア社会主義革命の隊伍を形成しよう。

共産主義同盟(全国委)とともに五・一五沖縄現地闘争の大爆発をかちとろう。



県収用委の審理打切り宣言に詰め寄る反戦地主と支援 (3月20日)

明にたつた反戦地主会平安会長は、また五・一五を一ヶ月前にひかる収用裁決をうちおろした。ここへいたる収用委の「公開審理」とは、五・一五までに強制収用を行なうためのアリバイであり、沖縄を侵略反革命前線基地の島として永久固定せんとする日帝の攻撃であつた。法的手続きさえ無視し、貫して「職権」をふりかざして押しすすめたのはそのためである。反戦地主はただちに三月四日、審理継続要求の集会を開き、面会を拒否する収用委に対して、三月二四日から県庁構内での座り込み闘争、二九日からはさらに戦術を強化し、自己の命と信念をかけた二時間のハンストに突入した。だが収用委は、この不屈のたたかいをおしつぶさんと、ハンストの終わる四月一日に収用裁決をうちお

たたかいの経過を報告し、「収用委員会長自宅前での座り込み、ハンストをする用意がある」との決意を表明し収用裁決を糾弾した。さくしてしまおうとする日帝の攻撃でされた。主催者代表として違憲共闘の手先II収用委を怒りを込めて糾弾するとともに、返還地への自由立ち入り・自由使用の実現など八点の闘争方針を提起した。決意表認した。

では中核派に代表される急進民主主義者はどうか。彼らはいう。「沖縄問題の解決は、いかなる意味でも帝国主義のもとではありえず、ただ日帝打倒!!日本革命、世界革命のかにのみありうる」。そして五・一五決戦は「帝国主義が生きのびるか、沖縄県民が人間として生きぬくか、侵略戦争にむかう帝国主義の非道な攻撃を打ち破るのか、それに圧服されてしまうのか、をかけたたたかい」である。彼らの強調する「日帝との闘争」が戦争政策との対決に一面化されることはもさることながら、彼らは日帝の直接支配下におかれた沖縄階級闘争が直面する転換点をどのように領導するのかという根本問題にふれることなく、ただ沖縄人民のたたかいの自然発生的高揚のみを願望するという誤りにおちいっている。

この証左である。

空港廃港・対話拒否・実力闘争の基本路線堅持し

# 闘う反対同盟の雄姿示す



3・28

## 三里塚現地闘争

集会にはヨーロッパの代表がかけつけた

三・二八三里塚全国闘争は、昨年来の日帝・公団の話し合い攻撃をそのまま受け、勝利的にたたかれた。午前十一時、反帝戦線(全国委)を中心とする労働者学生の部隊は、三里塚第一公園に登場し、蜂起派、戦旗派、三支労の諸君とともに前段の集会を開き、反対同盟の小川源氏、長谷川たけさん、笛川英祐氏の檄をうけた。三氏は共通して「一部幹部の話し合い路線に反対し、日本人民の未来をかけた反戦

正午すぎ、全国から一万四千名の結集のなかで熱田誠氏、小川耕平氏の司会のもと熱田一氏の集会宣言、小川源氏の主催者代表あいさつによって集会は開始された。両氏は、「このかんの切りくずし攻撃を同盟は粉碎した。同盟の基本路線は不变であり、必ず二期阻止をかちとる。三里塚闘争を反戦反核闘争の砦にしていく。フランクフルト、ラルザックなど世界の人民のたたかいと連帯し勝利するまでたたかいぬく」と力強く宣言した。

つづいて登壇した北原事務局長は、基調報告のなかで、石橋・内田氏を解任し、新役員体制をもつて二期阻止をたたかいことを報告し、三里塚闘争のたたかいが、代償を求めるたたかいではなく日帝との真正面からのたたかいであることを再確認した。そして、五一三反核闘争へ決起し、七月四日には一六年前の闘議決定弾劾の

「反憲学連を解体・一掃する全國陣型の建設」をかかげ、四月二十五日一時より全国学生共同行動がおこなわれた。反憲学連リファシズム学生運動と不屈にたたかう日本文理連絡会議(銀ヘル)のよびかけに応え、会場の山の手教会は千名近いたかう学生によつて埋めつくされた。

集会冒頭に、日大闘争の記録フィルムが上映された。八〇年秋、青龍刀・日本刀で武装した反憲学連の登場以降、十名を越える逮捕者、数えきれぬ負傷者を生みだし、つとも不屈の実力反撃戦をたたかう日大生の姿に接し、集会は一気に戦闘的ふんいきに包まれた。

集会基調の報告につづいて、発言の最初に中央大・神奈川大・島根大など反憲学連と学内においてたたかう各大学より特別アピール

ついで、三里塚反対同盟青年行動隊、日大元講師小林氏より連帯のあいさつがおこなわれた。そして、日大商業部を皮切りにして実行委に結集する各大学からの決意表明がつぎつぎにおこなわれた。なかでも、関西最大のファシズム学生運動の拠点!!京都産業大学の社会思想研究会の学友は、「産大における右翼支配は暴力支配を基礎にしつつも合法的自治会機構を通じて貫徹されている。ファシズム学生運動との大衆的実力闘争かつも不屈のことなくたたかうとともに、彼らの抬頭の基盤となつてゐる学生大衆の絶望感・疎外感の深まりと階級意識の解体状況を直視し、プロレタリア階級解放の大道と直結した革命的学生運動を創出しなければならない。このた

ズムの準備と対決し、社会主義革命にむけたプロレタリアートの階級闘争に主体的に結集する新たな



# 全国学生共同行動に一千名

4・25

## 東京・山の手教会

がおこなわれる。

たかいなしにはファシズム学生運動が注目をあつめた。また、千葉淑徳大社思研の学友は、戦争とファシズム学生運動に眞に勝利する道

は何か、八〇年代学生運動再編の課題に正面から答えていかねばならない。それは、戦後日本学生運動の中に巨大な影響を有した「層としての学生運動」に主体的に決着をつけ、プロレタリア階級解放の大道と結合した革命的学生運動の流れを創出していくことである。学生運動の中から、階級的労働運動と広範な人民の政治的統一戦線に結集する学生を広範に創出しよう。革命党建設と結合した八〇年代学生運動の戦士を建設し、

学生運動の創出を訴え、八〇年代学生運動の方向を鮮明に提起した。そして山の手教会における集会の最後に、不当逮捕攻撃をあびつも不屈にたたかう銀ヘルの学友の戦闘的デモを貫徹した。

## ファシズム学生運動解体かかげ

本年の四・二五学生共同行動は、たかいなしにはファシズム学生運動が注目をあつめた。また、千葉淑徳大社思研の学友は、戦争とファシズム学生運動に眞に勝利する道は何か、八〇年代学生運動再編の課題に正面から答えていかねばならない。それは、戦後日本学生運動の中に巨大な影響を有した「層としての学生運動」に主体的に決着をつけ、プロレタリア階級解放の大道と結合した革命的学生運動の流れを創出していくことである。学生運動の中から、階級的労働運動と広範な人民の政治的統一戦線に結集する学生を広範に創出しよう。革命党建設と結合した八〇年代学生運動の戦士を建設し、ファシズム学生運動・日共学生運動の支配から圧倒的多数の学生を動員運動と広範な人民の政治的統一戦線に結集する学生を広範に創出しよう。革命党建設と結合した八〇年代学生運動の戦士を建設し、ファシズム学生運動・日共学生運動の支配から圧倒的多数の学生を動員運動と広範な人民の政治的統一戦線に結集する学生を広範に創出しよう。革命党建設と結合した八〇年代学生運動の戦士を建設し、ファシズム学生運動・日共学生運動の支配から圧倒的多数の学生を動員運動と広範な人民の政治的統一戦線に結集する学生を広範に創出しよう。革命党建設と結合した八〇年代学生運動の戦士を建設し、

学生運動の創出を訴え、八〇年代学生運動の方向を鮮明に提起した。そして山の手教会における集会の最後に、不当逮捕攻撃をあびつも不屈にたたかう銀ヘルの学友の戦闘的デモを貫徹した。

学生運動の創出を訴え、八〇年代学生運動の方向を鮮明に提起した。そして山の手教会における集会の最後に、不当逮捕攻撃をあびつも不屈にたたかう銀ヘルの学友の戦闘的デモを貫徹した。

を採択して集会をしめくくり、番神三叉路までのデモンストレーションが敢行されたのである。

### ●三・二八闘争の成果●

三・二八闘争の意義は次のものとしてあつた。

第一に対話攻撃に屈服した一部幹部を解任し、新指導部を選出し敵の組織破壊攻撃に歯止めをかけ、反撃の橋頭堡をつくりだしたことにある。この地歩をさらに組織的に発展させるなかで、石橋・

をかかげ、三里塚闘争を反戦反核闘争の砦として、より全人民的なものへとおしひろげていく方向性が打ちだされたことである。そしてまたフランス・ラルザック、西ドイツ・フランクフルト代表団の集会参加により、反戦反核を軸とした国際的なたたかいのうねりと

水路を切りひらかんとする敵の攻撃を絶対に許してはならない。

その時、刑法改悪・保安処分絶対反対の立場を投げ捨て、法務省との「意見交換会」をつみ重ねる

刑法改悪・保安処分新設阻止

内田両氏の屈服を根本から批判し

きり、根本的自己批判と前線への復帰をかちとることによって問題を決着づけねばならない。

### 第二に「三里塚軍事空港粉碎」

三月十七日早朝九時より日比谷小公園において、第六回「意見交換会」粉碎闘争がおこなわれた。

刑法改悪・保安処分新設をめぐる

攻撃は今春きわめて重大な局面を迎えていた。「精神障害者」に対する差別・分断・隔離・抹殺の攻撃を徹底強化し、ファンズムへの

水路を切りひらかんとする敵の攻撃を絶対に許してはならない。

その時、刑法改悪・保安処分絶対反対の立場を投げ捨て、法務省との「意見交換会」をつみ重ねる

刑法改悪・保安処分新設阻止

内田両氏の屈服を根本から批判し

きり、根本的自己批判と前線への復帰をかちとることによって問題を決着づけねばならない。

### 第三に「三里塚軍事空港粉碎」

三月十七日早朝九時より日比谷小公園において、第六回「意見交換会」粉碎闘争がおこなわれた。

刑法改悪・保安処分新設をめぐる

攻撃は今春きわめて重大な局面を迎えていた。「精神障害者」に対する差別・分断・隔離・抹殺の攻

撃を徹底強化し、ファンズムへの

水路を切りひらかんとする敵の攻

撃を絶対に許してはならない。

その時、刑法改悪・保安処分絶対反対の立場を投げ捨て、法務省との「意見交換会」をつみ重ねる

刑法改悪・保安処分新設阻止

内田両氏の屈服を根本から批判し

きり、根本的自己批判と前線への復帰をかちとることによって問題を決着づけねばならない。

### 第四に「三里塚軍事空港粉碎」

三月十七日早朝九時より日比谷小公園において、第六回「意見交換会」粉碎闘争がおこなわれた。

刑法改悪・保安処分新設をめぐる

攻撃は今春きわめて重大な局面を迎えていた。「精神障害者」に対する差別・分断・隔離・抹殺の攻

撃を徹底強化し、ファンズムへの

水路を切りひらかんとする敵の攻

撃を絶対に許してはならない。

その時、刑法改悪・保安処分絶対反対の立場を投げ捨て、法務省との「意見交換会」をつみ重ねる

刑法改悪・保安処分新設阻止

内田両氏の屈服を根本から批判し

きり、根本的自己批判と前線への復帰をかちとることによって問題を決着づけねばならない。



(3月17日) 日比谷

## 連続闘争うちぬく

3・17～18 東京

省より三例、日弁連より十三例の「犯罪例」を提起し、「精神障害者の犯罪防止」という観点から対策を協議するという犯罪的なしろものであった。

日比谷小公園入口を機動隊で封鎖し、「意見交換会」会場である日弁連会館へ一步たりとも近づけまいとする弾圧をはねかえし、三・一七実行委に結集する部隊は集

日弁連の屈服を粉碎することは不可能ではない。救援連絡会議・赤堀中闘委・全国精神「病者」集団などの熱烈な決意表明をうけ、ひきつづく刑法闘争を全力でたたかうことが固く確認された。そして、午後からは芝公園に会場を移し、戦闘的な三五〇名のデモを日比谷小公園まで貫徹した。

また翌十八日、千五百名の結集をもって「刑法改悪・保安処分新設阻止中央行動」が日比谷公会堂前にておこなわれた。この

集会は、刑法改悪案三月国会上程の前に「今国会上程を見送る」旨の表明をおこなった。われわれは、たたかう「精神障害者」と全く連帯し、この三月闘争の成果をもって刑法改悪・保安処分新設そのものを葬り去るたたかいへと前進しなければならない。

## 三里塚反対同盟迎え 全関西

3・21

昨年の十二・十二労働者討論集会の成功をひきつき、三月二一日、集会のはじめに映画「三池闘争」が上映された。総評主義の枠内にあつたとはい、三池にしめされた労働者の戦闘的たたかいは、集会参加者の胸を熱くさせた。

今回も労働者活動家を結集して開催された。総評主義の枠内にあつたとはい、三池にしめされた労働者の戦闘的たたかいは、集会参加者の胸を熱くさせた。

同盟を入れて、約五〇名の労働者活動家を結集して開催された。総評主義の枠内にあつたとはい、三池にしめされた労働者の戦闘的たたかいは、集会参加者の胸を熱くさせた。

今回も労働者活動家を結集して開催された。総評主義の枠内にあつたとはい、三池にしめされた労働者の戦闘的たたかいは、集会参加者の胸を熱くさせた。

巨大な歴史的転換期・分解期を迎えたたかう労働者たちに問われ、「準備会春闘」としてその反対し、彼らから日本労働運動の主

これに抗する階級的労働運動の戦略的陣型を、先進的部分が共同の力で構築していくことをめざして

呼ぶに値しない同盟JC、総評民同の翼賛運動ときぱりと決別し、彼らから日本労働運動の主

体から決意表明がおこなわれた。

## 4・12 京都南部で労働者集会

春闘のさなか、四月一二日、右

つづいて実行委を構成する諸団

翼的労戦統一反対を鮮明にかかげて、会場の京都・久御山町公民館大ホールを約六百名の労働者で埋

めつくりし、洛南地区春闘総決起集会が開催された。

当日、三百名の労組員の組織化をかちとったタカラブネ労働組合をはじめ、集会には、中金支部、

寺内支部などの全金規模別共闘各

「げんをかえせ」の上映にはじまり、

！」の集会スローガンにしめされ

ばらうで幕をとじた。

後に会場割れんばかりの団結がんばった。この成果を、右再編に抗す地

域労組連運動のさらなる発展の糧としていくことが問われている。

# 新階級労働運動の戰略的陣型を構築せよ！

八二春闘は春闘史上初の「交通ストなし」という結果をもつて幕がおろされようとしている。今春闘の最大の特徴点は、七%前後の低額妥結や、国鉄労働運動へのかつてない攻撃にしめされた敵階級の攻勢のすさまじさにのみあつたのではなく、むしろそれが同盟・JCを筆頭とする右翼労戦統一派と総資本の連合によって可能になつたことにある。四月八日のJC一発回答から一二日の私鉄スト収拾、そして一四日の公労委による「民間賃金準拠確約」を受け入れての公労協スト中止決定にいたる過程は、「準備会春闘」がブルジョワジーへの際限ない妥協、大衆闘争の爆発の抑制の別表現であり、「管理春闘」にほかならないことを浮きぼりにした。スト回避にもつとも精力的に走りまわつたのは労働貴族たちであった。

ブルジョワジーは完全なる労資協調のもとでえられたこの結果にたいし、「金額・率とともに昨年にくらべて減つており、だいたいにおいてよいと思う」(大槻日経連会長)と満足の意をしめしている。そればかりでない。五

島東急電鉄社長などは「鉄鋼回答プラス一三〇〇円」の私鉄回答を、「私鉄総連の統一準備会参加にたいするご祝儀」であるとぬけぬけとのべたてているのだ。

結局「準備会春闘」のもとでは労働者は何ものもえられないことが誰の目にもはつきりした。逆にそれは合理化・行革攻撃に拍車をかけ、労働者内部の賃金・労働条件の較差を拡大し、労働者大衆の生活をますます困難なものにするばかりでなく、資本主義の防衛と救済の道||侵略反革命戦争とファシズムの道と決別し、彼らから日本労働運動の主導権を奪いかえすたたかいに立ちあげるべき時なのである。産業報国会化攻撃の嵐に抗し、労働戦線の左からの再編を本格的に開始すべき時なのである。これがたたかう労働者の八二春闘総括の柱とならねばならない。

なわち労働運動そのものの解体||産業報国会化、これがもくるまれる「労戦統一」の本質であり、目的である。

「労戦統一」問題は、民間大単産でのいつたんのヤマは越え、右翼的労戦統一派の次の照準は、敵の行革攻撃と連動して、公労協・官公労労働運動の解体・再編に定められつつある。本年七月に予定される第二臨調基本答申の発表は、これにいつそう拍車をかけるであろう。

このようなかで総評内で大きな流動と分離が開始され、いくつかの反対派勢力が生みだされている。それは大別して三つの部分に分類できるだろう。第一の部分は民間労組における中小を軸とした戦闘的労組や全金・私鉄などの内部の「労戦統一」反対派であり、第二の部分は国鉄・自治労・教組など官公労親系労組である。しかし、現状においてはこれら三つの部分が巨大な右再編の動きにたいして、正面から対決しうる条件を有しているとはいえない。

## 労働戦線の現状と我々の基本的方向

昨年一二月一四日、同盟・JCを主軸にして三九单産によって結成された統一準備会は、本年秋の協議会への移行をめざし、総評民間労組と官公労への攻撃的なきりこみを本格化している。本年に入り、総評・民同は私鉄・全金など七单産の準備会参加を決定し、同盟とのヘゲモニー争奪をめぐる一定の拮抗関係を生みだしながらも、基本的には同盟・JC路線との合流の道を完全に選択しきった。

同盟・JC、総評・民同をはじめとしたこの右派勢力の路線は準備会参加の踏み絵である「基本構想」としてすでに確定しており、彼らは公然たる帝国主義労働運動派として日本帝國主義の戦略的方向||戦争とファシズムの道に忠実にそつて労働運動を制圧し、労働者を排外主義的に統合しようとしている。す

なわち労働運動そのものの解体||産業報国会化、これがもくるまれる「労戦統一」の本質であり、目的である。

「労戦統一」問題は、民間大単産でのいつたんのヤマは越え、右翼的労戦統一派の次の照準は、敵の行革攻撃と連動して、公労協・官公労労働運動の解体・再編に定められつつある。本年七月に予定される第二臨調基本答申の発表は、これにいつそう拍車をかけるであろう。

このようなかで総評内で大きな流動と分離が開始され、いくつかの反対派勢力が生みだされている。それは大別して三つの部分に分類できるだろう。第一の部分は民間労組における中小を軸とした戦闘的労組や全金・私鉄などの内部の「労戦統一」反対派であり、第二の部分は国鉄・自治労・教組など官公労親系労組である。しかし、現状においてはこれら三つの部分が巨大な右再編の動きにたいして、正面から対決しうる条件を有しているとはいえない。

民間労組では、すでに統一準備会から協議会への大道がひかれてからの中も、とりわけ全金では東京・大阪・京滋を中心にして全中央への激しい抵抗戦がおこなわれているが、質力の欠陥などによって、苦闘を強いられており。官公労「左」派組合も、現下の民間を明確な対抗軸と責任ある指導部の未形成、物中心にして進行する右再編に左の側から積極的に介入し、たたかう部分との共闘をつくりあげていく条件を歴史的主体的に失つてしまつてはいる。むろみずからの防衛で手一杯となり、国労・労働中央などにしめされるようになれば、敵の攻撃への屈服と妥協の道を歩んでいるのが現状である。ゆいといつ統一労組懇勢力のみが、いつでも独自に新ナショナルセンターを旗上げできる最低限の組織的条件を保持しているといえる。しかし彼らの路線は統一準備会との階級的分歧をひきくるものとしては

まったくない。資本主義擁護とその改良を本質とするという点で、彼らは右派潮流と密通する部分である。彼らの新ナショナルセンターフラグ上げが、階級的労働運動への「左」から敵対となることははつきりしている。

このような否定的現状にもかかわらず、すべての労働運動の戦場から反「労戦統一」の旗上げが、階級的労働運動への「左」から敵対となることははつきりしている。

たかいがわきおこり、ここ数年のうちに再度、再々度の巨大なうねりが生起することは不可避である。それは何よりも本年の「準備会春闘」が「七%春闘」「完全ストなし春闘」としてたちあらわれたように、現下の進行する「労戦統一」が労働者大衆の階級的利益と根本から対立するものにほかならないからである。ひとにぎりの右派指導部と労働者大衆のあいだの矛盾は、ますます拡大し先鋭化しつつある。

問われている緊急な課題は、このような予想される流動・分解過程に、組織・戦術をふくめたトータルな階級的労働運動の路線内容をもつて革命的部分が介入を組織し、帝国主義労働運動派と明確な大衆的分岐を引ききていくことである。われわれは独自の大衆的結集軸と組織的受け皿を独力でも準備しなければならない。それは壮大で長期にわたる事業ではあるが、もつとも先進的な労働者たちによる新たなナショナルセンター構築の展望をきりひらくたかいである。

われわれはまず、先進的部分の全国的結集

体である「労働情報」に結集する労働者活動家たちをはじめとして、全国の「労戦統一」に反対する労働者大衆の責任ある指導部、領導者として自己をうちきたえていかねばならない。そして、日本労働運動の左からの分裂を組織する主体的条件を急速度に獲得していくかねばならないのである。

## 当面する具体的環 新合同労組の建設

われわれは現下の「労戦統一」＝労働運動の解体攻撃に抗し、真に階級的な労働運動を構築・再組織化するにあたり、まず先進的活動家層を中心とした当面の共同の事業として、新たな合同労働組合の建設を全国からおしすめていくことを呼びかける。それは企業の壁・単産の壁をとりはらつた、たたかう労働者の大衆的団結体の建設事業であり、全国的な労働運動の分解過程のなかに攻勢的にうつてしていくための、基礎的条件を獲得していく事業である。われわれはなぜここから開始しようと考えるのか。以下、新合同労組建設に關する問題提起を三点にわたっておこないたい。

第一に階級的労働運動創建のためのたたかいは全国的な戦略的陣型の構築を不可避とする段階に入つており、その最初の核形成をわれわれは新合同労組建設のうちに定めるべき

だと考える。

戦闘的労働組合は全国に多数存在している。

まだ進行する右再編は、それらの労働組合による新たな地域共闘づくりにむかわせている。

いま左派労働運動の内部で潜在的・顕在的に煮つまりつつある問題は、個々の労働組合や地域共闘の献身的実践が内包する発展的要素を、それらの全国的点在性・分散性を突破し

て、質において量において全国的に統合せねばならないという新しい課題である。そうしなければ彼らは個別擊破されるか、無力な反対派として右翼再編の大勢にのみこまれてしまいうような情勢が到来しつつあるからである。

このときまず枠組としてたちあらわれる

のは、戦後労働運動を制約し、帝国主義労働運動に力を与えつづけてきた本工労働者中心の企業別労働組合である。それは、企業意識の基盤となり、あるいは本工主義を再生産する条件を提供してきた。さらに企業別組織が

労働組合の「常識」とされる情況下で、圧倒的多数の労働者は未組織のまま劣悪な労働条件のもとに放置される構造が固定化された。

われわれが労働者階級多数の獲得をめざし、労働者内部の差別分断支配とたたかい、労働者大衆を单一の階級へと形成せんとするとき、企業別組合が不斷に促進する企業意識、本工主義との現実的な闘争を組織することは、も

っとも基礎的な課題となる。散在する未組織労働者をも包みこむ企業枠をこえた同一の組織を獲得すること、これをいくつかの地域から先行的につくりあげていくことを通じてわれわれは、必要とされる階級的労働運動の全

国的な戦略陣型構築の実際上の突破口をきりひらいていくことができると確信する。新合同労組の建設はまずこう位置づけられる。

第二に先進的労組活動家たちは、こんにち

自己の活動を一単組内活動に限定するのではなく、「全国的陣型構築」をになう主体へと自己を飛躍させることをますます要求されているのであるが、この主体形成を新合同労組建設の事業は、もつともよく保障すると考える。

現状況下で「拠点の防衛のみに腐心するな

らば、多くの実例がしめしているように後退と敗北はまぬがれない。先進的活動家たちに

よる各種の共同行動の組織化、経済闘争のみならず政治闘争におけるそれぞれの指導下の

大衆に責任をもつた共闘関係の構築がなされねばならない。それはすでに各種の官民共闘

や地域共闘の形成として全国でおしすすめられている。しかしそれがあくまでも企業別労

組の共闘関係にとどまるならば、各労組内活動家を真に階級的な、すなわち一単組内大衆

指導にのみ責任をもつて、階級総体の組織化に責任をもちうるような活動家へと

育成していく事業にとつては、決定的に不足

である。われわれが階級的労働運動の旗をかげて労戦再編に正面からの切りこみをおこ

なうとするとき、全国的に機動しうる多数の労働者活動家たちを一つの層として獲得す

る事業が絶対に必要である。しかし現在彼らが自分を眞の階級的活動家としてきたえあげ

していくための戦場は、非常に限られたものとしてしか存在していない。必要なならばいつで

もどこでも、他の労働組合大衆のために働き、労働運動未組織労働者の利益のために働き、労働運動の左からの全国的再編のために働きうるよう

な意識性をもつ活動家群を、育成するためのたかいが本格的に開始されなければならない

い。

全国的政治闘争の組織化や地域共闘の形成をベースにして、新合同労組建設の事業に彼らのエネルギーを解放していくことによつて

既存合同労組は当初の先駆的実践にかかわらず、こんにちひとつつの逢着点をむかえている。

第三に七〇年代初頭以降、新左翼労働運動の一形態として発生したすでに存在する合同労働組合の限界性を、新合同労組建設によつて突破しなければならないとわれわれは考える。

既存合同労組は、その左傾化を客観的根拠としながらも、一部に根づよく存在する小数派分裂至上主義や疑似党派的傾向を主体的根拠とするものであり、このことによって彼らの多くは労戦再編再編問題にきわめて客観主義的な位置しか有しないくなっている。

この袋小路から合同労組を解放しなければならない。

その基本的方向性は、合同労組を全精力をかたむけて、大衆の生きんがため食わんがための第一次團結体として再確立することであ

り、あらゆる機会をとらえて全体の労戦再編過程への積極的介入を組織することであり、また「活動家集団」として内包してきた先進性を、労働組合の外部に階級的政治的組織を建設することによって解放していくことである。

以上三点の視点をふまえてわれわれは、新

合同労組建設への着手を開始することを全国のたたかう労働者によりかける。個人加盟、二重加盟、単組加盟のいずれも保障する新たな合同労組の建設をもつて、帝国主義的労戦

統一に対決する階級的労働運動派の一大陣型構築にともにふみだそう。